



病歴と診察で 診断する感染症

System 1 と System 2

志水太郎、忽那賢志＝編

定価：本体 4,200 円＋税
B5・236 頁／医学書院／2018
[ISBN 978-4-260-03538-5]

バイキンの先生ではなく “真の内科医” になるために

評者 | 岡 秀昭 埼玉医大総合医療センター総合診療内科・感染症科部長 / 准教授

レプトスピラ症、メリオイドーシスなど感染症医が喜びそうな診断名も散見されるが、本書は決して感染症オタクのための本ではない。

“真の内科医” による執筆

私は常日頃から、感染症の研修を開始するにあたり、まずは「内科」の研修をしっかりと修了することを勧めている。というのも、私自身がそうであったのであるが、単に微生物や抗菌薬に詳しいだけではバイキンの先生であって、“真の感染症内科医” にはなれないのである。これは、循環器でも消化器でも同じではないかと思う。感染症科医なのか、それとも感染症内科医なのか。循環器科医なのかそれとも循環器内科医なのか。私は、“真の内科医” に憧れる。

本書は、決して編者の忽那賢志先生のような感染症専門家ばかりで書かれているわけではない。編者の志水太郎先生は総合診療の若きリーダーであり、他の著者も総合診療医の実力者、“真の内科医” が多数名を連ねる。また感染症専門家が著者であっても、私の憧れる“真の内科医” により書かれている。

診断過程と疾患知識を同時に身につけられる欲張りな本

感染症は臓器非特異的に生じるため、診断には的確かつ詳細な病歴聴取と全身をくまなく診察する能力が求められる。診断がつけば、微生物を推定し、適切な抗菌薬を選択すればよい。つまり、「診断」が大きなウエイトを占める。真の内科医であれば、「病歴」と「診察」で診断することにこだわりたい。

本書は、洗練された総合診療医と感染症内科医たちによる「System 1」の判断や「System 2」の思考による診断過程を学ぶことができ、合計 36 例の症例を検討・追随することで感染症の知識も身につけることもできる欲張りな書籍である。

憧れの内科医・総合診療医・感染症内科医をめざすすべての医師にお勧めしたい。

